

仏様のおはなし新シリーズ第133集「領解文」

「もちろんの雑行雑修自力の心をふりすべて、一心に阿弥陀如来、わからが今度の一大事の後生、御たすけそうらえとたのみ申してそろう。たのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定とぞんじ、この上の称名は、御恩報謝とぞんじ、よろこびもうしそうろう。この御ことわり聴聞申しわけそろううこと、ご開山聖人ご出世のご恩、次第相承の善知識のあさからざるご勸化のご恩と、ありがたくぞんじそうろう。このうえはさだめおかせらるる御おきて、一期をかぎり、まもりもうすべくそろう。」

蓮如上人のお言葉と伝えられる『領解文(りょうげもん)』です。「私は念佛以外の行や自力のはからいを捨て、一心に阿弥陀さまのお救いにお任せいたします。その心がおこうた時既に救われていたこと、私のお念佛はそのお礼の念佛と聞き喜びに溢れています。この法に出遇えたのは親鸞聖人をはじめ、先人達のお導きのお蔭です。この先は生涯念佛者として歩んでまいります。」という上人の念佛申す喜びの告白文です。

お寺ではご法座の終わり等に皆で声を合わせて唱和してきました。寺で生まれた私も幼少期に覚えさせられ、寺の例会では声を揃えて唱えましたが、何の事やら分かりませんでした。

その後意味も学び僧侶となつて数年後、親しかつた先輩が病気で亡くなりました。寺の跡取り、まだ三十そこそこの若さでした。お通夜にお参りしますと、当然ながら悲しみに満ちていました。跡継ぎ息子を失つたご住職、これから寺を担うべき若者を送るご門徒たちの無念は如何ばかりか。やはりきれない気持ちで座つておりました。

お通夜の最後にご住職が挨拶され最後に「お領解出言！」と力強く言われるや、一同「もちろんの…」と声を揃え堂内割れんばかりの領解文が響きました。私も共に御文をいただきながら熱い思いが湧くのを感じました。悲しみの縁にありながらもお念佛とともに歩んで行く皆様の決意と聞かせていただいたことでした。

